

一国史を超えて：関東大震災における朝鮮 人虐殺研究の50年

姜，徳相 / Kang, Duk-Sang

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大原社会問題研究所雑誌 / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

668

(開始ページ / Start Page)

6

(終了ページ / End Page)

23

(発行年 / Year)

2014-06-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010165>

一国史を超えて

——関東大震災における朝鮮人虐殺研究の50年

姜 徳 相

研究史の回顧と残り続ける違和感

最初に研究史について述べておきたい。

戦後最初に歴史学の立場でメスを入れた人は横浜の斉藤秀夫さんで、「関東大震災と朝鮮人さわぎ」(『歴史評論』99号、1958年11月)です。

摂政の宮の箱根行幸の警備で緊張していた横浜の警察が流言を流したという考えで教えられるのが多かったのですが、「さわぎ」というテーマに違和感を持ちました。斉藤さんに刺激され私も研究してみようと思いました。

約5年かかりましたが戦後の日本社会がこの問題に注目したのが、みすず書房『現代史資料 関東大震災と朝鮮人』(1963年10月)刊行と、私の「関東大震災に於ける朝鮮人虐殺の実態」(『歴史学研究』1963年7月)、「大震災下の朝鮮人被害者数の調査」(『労働運動史研究』1963年7月)、「つくりだされた流言」(『歴史評論』1963年9月)の発表と時を同じくして『思想』(1963年9月・1964年2月)に京都大学の松尾尊允さんの論文であったと思います。同じテーマですが、二人の考えが違うという問題が出てきました。それは何かと言うと、虐殺の動機となった「流言」・朝鮮人が井戸に毒を入れた、爆弾を投げた、婦女を強姦したとかいう流言・蜚語がどこから出たのかと言うことです。松尾さんは、流言は日本の根深い朝鮮民族に対する民衆的な偏見、差別感が根っこにあって、そこから出たと、だから流言・蜚語が出た場所は一カ所ではなくて、震災地域、関東一円、至る所に流言の発生源があるという主張をされました。

私は、流言発生は日本人一般ではなくて、それよりも朝鮮人を監視、或いは取り締まるという事を専門にしていたプロがいて、それは憲兵であり警察であると、その警察の部局にいた者は日常警戒視することで教育、訓練を受けていると、そういうことを記した文書などもたくさん残っている。その頃の朝鮮人は関東一円に2万人しかいなく、ほとんど工事現場と共に消え去る人で、一般民が接点を持ったのは、たまに来る飴売りの行商人くらいであった。偏見、差別感とは隣にちょっと変な習慣を持っているとか、違う変な言葉を喋ると言う事で発生する事が多い。近所に朝鮮人をほとんど見られない状況で、もし偏見があったにしても、自分の命、家族の生命、財産を必死に考えている人が「朝鮮人が放火したから」「井戸に毒を入れた」とか考える心の余裕があるのか、というのが私の考えでした。この論争は2回3回で終わるのですが、結果的には松尾さんの方から言われたことですが、あなたの考えは悪いのは帝国主義であって、民衆にはないのだと、民衆免罪

論でした。だから朝鮮人がやられたのは帝国主義が悪者、日本民衆も帝国主義の犠牲者であるのだという立場に立つのがあの頃の国際主義でした。それもそうだなと言う感じもしましたが、この問題はその後にも決着がつかないで、事あるごとに官憲説、民間説、横浜説などの話が脇から出てきたりして、関東大震災朝鮮人虐殺が何故起ったのかという事に関しては、常に責任の所在が曖昧にされたというのが事実です。（松尾尊允、姜徳相・琴秉洞『現代史資料6 関東大震災と朝鮮人』1963年への書評（『みすず』1964年2月）、姜・琴「松尾尊允氏『関東大震災と朝鮮人』書評についての若干の感想」（『みすず』同年4月）、松尾尊允「関東大震災下の朝鮮人暴動流言に関する二、三の問題」（『朝鮮研究』33号、1964年）、姜徳相「つくりだされた流言—関東大震災における『朝鮮人虐殺について』」（『歴史評論』1973年9月）参照。）こうした中で「三大虐殺事件」という定義に対し批判が occurs します。

この説は1963年7月『労働運動史研究』の特集で塩田庄兵衛さんが「扼殺三大事件」、今井清一さんが「白色テロル事件」と定義し、1968年6月『エコノミスト』で「社会主義弾圧のノロシ—三大虐殺事件」と再論し、その後1975年9月に犬丸義一さんらが「関東大震災と朝鮮人虐殺」で大杉栄事件、社会主義者10人虐殺の亀戸事件、朝鮮人虐殺事件を「三大白色テロル」としたことでわかるように日本史研究者の大方の見解でした。私はこの見解に中公新書『関東大震災』（1975年11月）で次のように批判しました。

「個々の生命の尊厳に差のあるはずはないし、異をとねえるわけでもないが、家族三人の生命、10人の社会主義者の生命と6,000人以上の生命の量の差を均等視することはできない。量の問題は質の問題であり、事件はまったく異質のものである。異質のものを無理に同質化し、並列化することは官憲の隠蔽工作に加担したと同じであるといえよう。前二者が官憲による官憲の完全な権力の密室犯罪であり、自民族内の階級問題であるのに対し、朝鮮人虐殺事件は日本官民一体の犯罪であり、民衆が動員され直接虐殺に加担した民族的犯罪であり、国際問題である。この相違を峻別しなければならない。しかし、日本での取りあげられ方は事件後から今日まで、著者が強調したのと逆の順で関心が強いようである。当時の三大総合雑誌『中央公論』『改造』『太陽』ほかいくつかの雑誌も大杉事件を中心に取りあげ、亀戸、朝鮮人事件へのページのさき方は順に少ない。この傾向は解放後も同じで、大杉事件、亀戸事件、朝鮮人虐殺事件の順で研究水準は低下し文献も少数化している。関心の高低の要因をどこに求むべきか、異質の事件としてのとらえ直しを待つ以外にないであろう。」

震災後の混乱の背景も違う別の事件であるとも提起しました。即ち朝鮮人虐殺は9月1日から始まり、2日、3日が最高潮であった。火事、余震、津波など人々が恐怖のどん底に陥ったが、火事より怖いのは人殺しの市街戦であった。一方社会主義者虐殺は、4日夜中の亀戸署で起った騎兵による、銃声を気にした刺殺（朝鮮人も数多く殺される）であり密室の犯罪であった。家族も殺されたのを知らなかった。警察は「釈放した」「田舎にでも帰省したであろう」とうそぶいていた。大杉は16日に甘粕正彦の待ち伏せに遭遇し捕まった。それまで彼は自警団にも参加し自由であった。そして憲兵隊構内の古井戸で死体はみつかった。それはたまたま大杉が逮捕連行されるのを見た人の証言があったからである。そしてそれは子供まで殺したことで大きな批判を呼び、甘粕は投獄され福田戒厳司令官は免職になった。亀戸も家族が騒ぎ出し10人の殺害を警察署長古森繁高が形式

的ではあるが謝罪をした。遺骨の返却問題では社会問題にもなった。しかし朝鮮人虐殺の犯人達は何ら処罰されていない。罪のほとんどは自警団に押しつけられて物議をかもした程度であると批判した。

私は9月4日以後の社会主義者や大杉家族の虐殺は官憲の密室犯罪で、それ以前の街頭での軍・警・民の三位一体の公然な朝鮮人殺しとは違う性格のものだと考えている。なお、社会主義者や大杉が自警団に参加し、夜警にでていたことを理由に、社会主義者は「殺す側にいた」と私の説に強い批判があったが、それは正しくは「殺されない側にいた」というべきで、そこに「民族問題」があることを強調したかったからである。自警団員が大杉や社会主義者の夜警を拒否しなかったのは事実である。この場を借りて補足弁明しておきたい。

その後ほぼ10年単位で資料や研究が深まるようになり1970年代には日朝協会の豊島支部による聞き書き集『民族の棘』（1973年9月）、埼玉の『かくされた歴史』（1974年7月）など目撃者の語る貴重な証言集が刊行されました。

1980年代になるといろんな個別の研究ができましたが、その中で特に気がついたのは、地域の真相を究明するということで、地方の小さな町、千葉の習志野の周辺で、船橋付近のどここの村でということがあったか、地域史の形で進んでいくということ（『いわれなく殺された人びと』1983年9月）、東京でも荒川の土手で何があったか（『風よ鳳仙花の歌をはこべ』1992年7月）、埼玉の浦和、熊谷、本庄、神保原、藤岡とつながる中山道で詩人萩原朔太郎をして「朝鮮人あまた殺され、その血百里の間に連なれり、われ怒りて視る、何の惨虐ぞ」（「近日所感」）とうたわしめた連続殺人事件はどうしておこったのかに対し、地域史の問題として地域の人の証言を取り入れる形で一つ一つの研究が固まっていくという実り多い成果が続出しました。特徴は地震被害が少なく焼け残った地域、住民の移動のなかった地域でした。まだその頃までは当時の体験者が生きていました。証言する人が最後に自分の見た事を正直に話す、時代の修正がつくと言う難点もありますが、大雑把ですが、実証は大枠出来ているのです。地域の細かいところを確定していく作業がそこで出てきたという事で、この千葉、荒川の証言を集大成としたのが呉充功監督の記録映画『隠された歴史』『払い下げられた朝鮮人』でした。

埼玉、千葉に比べていまだ不明な点の多いのが横浜です。犠牲者は最大とみられているにもかかわらず、個別の研究はすすんでいません。思うに最大の激震地で市街全体が潰滅する条件下、逆に、官憲の湮滅工作も万全であったと思われます。

90年代の特徴のひとつは、陸・海軍や政府の戒厳令資料、植民地朝鮮の反応、日本知識人の反応、児童の証言資料など、大部の文献資料の刊行、そして写された震災、描かれた震災など、写真や画集が発行されたことでした。

また、日本の研究者の中には追悼という問題として考える人が出てきました。過ちを繰り返さないため、どう追悼していくか、そういう意味で慰霊碑問題・慰霊碑がどこに建っているか、誰が建てたかというような事が出てきました。そこで問題になったのは慰霊碑を建てたのは日本人も多いけれど、誰が加害者かと言うことが、すべて消えていたと言うこと。被害者が誰で加害者が誰かということがあいまいで、なかには「異国人」の墓というのもあって、まだこの問題から解放されて

いない地域もある。このような問題があるということです。

関連して不思議なことというべきか、6,000名に及ぶ人殺しの中で、“私がやりました”という加害証言は皆無であった。

すべて“私は見た、聞いた”の類であった。また朝鮮人犠牲者の姓名の判明しているのは、知る限り一桁台にすぎない。一方中国人犠牲者は中国政府の調査団が来日した際、日本政府もその調査に協力、犠牲者667名の氏名が明らかになっている（仁木ふみ子『震災下の中国人虐殺』青木書房、1983年）。また台湾の档案馆には「日本震災惨殺華僑案」が保存されている。中国人指導者王希天の殺害者垣内八洲夫中尉（当時）の名も特定されている。つまり、「いつ、どこで、誰が、誰を殺したのか」という殺人事件の起承転結の調査はされているのである。中国人虐殺事件と朝鮮人虐殺事件の後始末のちがいは何を意味するのか、今後の課題である。

こうしたことを踏まえて、私は関東大震災80周年の時、朝鮮史研究会で「関東大震災80年を迎えて改めて考えること」を大会報告しました。ここで松尾さんや斉藤さんの横浜説に流言がどこから出てきたかのことで問題になり、その問題が曖昧なものになったという事だけど、ここで改めて官憲説が主体だとはっきりと申し上げたのです。会場にはたくさんの人が来ていましたが、あまり大きな異議は出なかったと思います。その後5、6年、私は個別な研究はしていませんでしたが、私なりにいろいろ考えて見ている内にどうも何か違和感が残りました。

戒厳令への着目

私の官憲説もしっくりしないと考えている内に到達したのが戒厳令です。

『震災・戒厳令・虐殺』（三一書房、2008年8月）所収の、「戒厳令なかりせば」が私の今の考え方の始まりです。どういう事かというと官憲説だけど、もっと補強されるわけです。戒厳令とは軍隊が権力を掌握する事です。内乱または戦争、この二つ以外は発令されない、なのに戒厳令が発令されたということ。では誰が内乱を起こしたのかと言うと朝鮮人です。水野錬太郎がはっきり言っています。敵は朝鮮人だと。その発令の時間も2日午後6時が公式の政府筋の発表です。

私は内務大臣水野や警保局長後藤文夫、警視總監赤池濃の手記からみて1日夜半内務大臣官舎の中庭で臨時震災救護事務局官制及び非常徴発令と戒厳に関する勅令が起草され、翌2日午前（恐らく8時頃）に閣議決定、午前中に摂政の裁可を得て公布されたとみるのが正しいと思います。「警備と救護」は一体というのが当局の考えであった事は赤池の手記に詳しく書かれています。ちなみに臨時震災救護事務局官制は勅令396号、非常徴発令は緊急勅令第397号、戒厳令は緊急勅令398号と連番になっています。では、戒厳令が布告された時間はいつか。内務省警保局長の「震災ヲ利用シ、朝鮮人ハ各地ニ放火シ、不逞ノ目的ヲ遂行セントシ、現ニ東京市内ニ於テ爆弾ヲ所持シ、石油ヲ注ギ放火スルモノアリ」と、極めて具体的に「反乱」の事実を認定した電文を起草した時はいつなのかの疑問に対し、私はこの電文を船橋送信所に伝達した伝令使砲兵軍曹角田健次郎以下6名の兵士、船橋送信所の公用使3名の行動記録の分析により、9月2日の午前8時頃にあった閣議とその後の摂政の戒厳令裁可の問題を考えると、2日の朝に起草と想定され、しかも起草時に「既ニ東京府下ニハ一部戒厳令ヲ施行シタ」と「既ニ」という過去形が使われているのは何を意味するのか。当局者の戒厳令公布の決断はかなり早かったのではないかと指摘したことがある（『関東大

震災』中公文庫、1975年参照)。

ともあれ政府の戒厳令発布の動きと連動して、「昨日来ノ火災ノ多クハ不逞鮮人ノ放火又ハ爆弾の投擲ニ依ルモノ」との流言が2日午前10時頃、意図的に急激に拡大したのは事実で、多くの証言は、9月2日午前10時頃から警察官が朝鮮人は殺しても構わないとふれ回っています。いろいろな地域の警察署長や町のボスが「鮮人は殺害可」と言っている。それを「〇〇の好意的宣伝」と聞いている人がたくさんいる。そういうことで考えて見ると戒厳令下に人が殺されているというのは何を意味するのか。戒厳令とは剣付き鉄砲を持った兵隊が町角にいる訳です。警察よりはるかに強力な治安組織ですね。

『地震・憲兵・火事・巡査』の著者、山崎今朝弥は、「人は到底環境の支配を免れない。ただでさえ気がすさみ殺気が立つ処へ剣付き鉄砲肩にしてピカピカ軍隊に市中を横行闊歩されたのではたまったものではない。戒厳令と聞けば人はみなホントの戒厳を思う。ホントの戒厳令は戦時を想定する無秩序を連想する。切り捨てごめんを思う。当時一人でも戒厳令中、人命の保証があるなど信じたものがあっただろうか。何人といえども戒厳中は何事も止むを得ないとあきらめたのではないか。現に陛下の名においていう判決においてすら無辜の幼児を殺すことも罪とは思えない当時の状態であったと説明しているのではないか」と述べています。

その戒厳の中で例えば自警団がつくられたにせよ、自警団が罪無き人を殺しているのを戒厳軍隊が何故阻止しないのか、という問題になります。それは実際の人殺しは戒厳軍がやった、軍隊が主力で警察は別軍、自警団が民兵となったが、途中で官憲犯罪を消去する必要に迫られたことから、自警団の殺害行だけが残されていくという形が真相だと思います。そこで私は極端にいうと戒厳令は朝鮮人に対する宣戦布告だと思います。それをどのように実証するのかという問題ですが、戒厳軍隊が実包を持って千葉の習志野や市川の国府台から東京に進攻して、江東地区を中心に虐殺を展開する形をとる。これはもういろんな形で軍隊の行動資料があり、先ほど紹介した「戒厳令なかりせば」という論文で実証しています。

市川の砲兵旅団第一連隊がどのような形で出てきたかを簡単に述べると、1日夜10時に小隊単位で出兵しますが、まだこの時は戒厳令が布かれていません。その時は避難民を救護するという目的で第1、第2、第3小隊と兵隊が出てきますが、第4小隊岩波隊の出動も当初は避難民救護目的が途中、2日の午前9時頃から彼らは小松川で人殺しを始めるのです。これはその時、戒厳令が発布されたということです。出先の将校が勝手に判断して人殺しをするということはないわけですから、そういう例がたくさんありました。戒厳令で軍隊が人殺しを始めた。同時に警官がメガホンを持って朝鮮人暴動を宣伝し廻ります。

それを見た民衆たちが自分たちもお国のために力を尽くすという、これも主として在郷軍人、青年団員、消防団員が中心となり自警団となるわけです。彼らは率先的かつ能動的に権力と結びつく。何故ならこの人たちはかつて軍事権力を行使した人たち、権力のOBだということです。朝鮮や中国やシベリアで人を殺した人たちです。そういう意味で戒厳令が対朝鮮人の国民連合となったということです。

ならば、なぜ朝鮮人が敵かという問題です。この筋書きは官憲説を補強する形になりますが、街角で非常線が張られます。自警団員の通行人あらためが始まります。その時皆に「15円50銭」を

言えと言います。壺井繁治という詩人が格調高い詩を書いています、「15円50銭」の発音は濁音の連続で、朝鮮語には濁音がないから「ちゅうこえんこちゅせん」としか言えません。すぐ朝鮮人とわかるのです。その場で朝鮮人はあの世送りです。日本人でも方言があって言えない地方人や琉球人は間違えられて殺された人もいました。「15円50銭」というのはまさしく朝鮮語改めで、言葉というのは民族そのものですから朝鮮民族に対する敵視の思想が秘められているのです。では「15円50銭」が朝鮮人の民族的特徴という事を町の自警団のおっちゃんたちが何故知っていたかと言うことです。先ほど私は関東一円に朝鮮人は2万人しかいないと言いましたが、町のおっちゃんたちは日常の在日朝鮮人をあまり見たことがないと思います。ところが彼らに「15円50銭」を言わせる。誰がそれを教えたか。それは官憲たちです。その証拠にこういう文書があります。大正2年、韓国を併合してまだ3年ぐらいしか経っていないときです。「朝鮮人識別資料に関する件」という文書があります。これは内務省の警保局が警察、役所の窓口で朝鮮人を識別するためのノウハウが書かれた文書です。和服を着て喋らなければ日本人とわからないので、こういう形で朝鮮人を識別して尾行をして調査の対象にするのです。その言動によって甲乙の符号を付けます。甲は民族心が強く日本に対して反抗的な人物ということで、通常5人尾行が付きまします。乙というのは甲程度でなくても民族心を持っているということで3人の尾行が付きまします。その他は能天気な者と識別する、人を甲乙に分け居留する朝鮮人を敵視するという制度の根本になるものです。ここには「身長内地人ト差異ナキモ、姿勢直シク腰ノ屈ムモノ及ビ猫背少ナシ」「顔貌亦内地人ト異ナラズモ、毛髪軟ニシテ且少ナク髪ハ下向ニ生ズルモノ多シ、顔面ニ毛少ナク俗ニ「ノッペリ」顔多シ」「髭、鬚ナドハ一般ニ薄シ」など。言語上「発言ニ抑揚頓挫アリ流暢ナリ」「発音ニ濁音（ガギグゲゴ）ハ最も困難トス」「発音ノ際ラ行ラリルレロハ判明セズ、例エバ（ラ）ハ（ナ）、（リ）ハ（イ）」。

よく調べています。「正座ニ堪ヘズ胡座ス、其ノ胡座ニ当リ左足ヲ右足ノ上ニ載セ膝トヲ交フルハ殆ド一定ノ例タリ」「婦人ニ対シテハ正面ヨリ見ズ側視スルノ習慣アリ」「書類（諸証書類又ハ信書等）ヲ蔵スルニ極メテ小サク折り畳ミ、巾着及袋中ニ納ムルノ風俗アリ」「一般ニ揮ヲ用ヒズ」。そういうことまで書いている。つまり「こいつらは何をやるかわからんぞ」、識別して監視するという観点に立っているもので、ここではイデオロギーはありません。区別して警戒すべきは民族のちがいのなのです。

「15円50銭言ってみろ」「らりるれろ言ってみろ」「君が代唄ってみろ」「都々逸唄え」、朝鮮人が知るわけがないのを役人は知っていて、自警団（民兵）になった連中にこれらを教え込んで自警団が朝鮮人を識別して虐殺を行う形になったと思います。

戦争状態が伏流化した日本の朝鮮支配

では何故朝鮮人を警戒しなくてはならないかという問題です。

私は震災で何故戒厳令が出たかを考えるとき、震災での虐殺事件の前提として30年に亘る前史、即ち甲午農民軍との戦争、そして露日戦争後日本の強占に反対して全土を鮮血で染めた7年に亘る義兵戦争を含めた「敵視」の思想形成を語らねばならぬと思っていますが、時間の関係で省略、朝鮮総督府という権力のあり方、そして3.1運動に続く「満州」、シベリアでの独立戦争を中心に話を進めたいと思います。

1910年朝鮮総督府が出来ます。総督は現役の陸海軍大将ではないとダメなのです。どうしてか。それは甲午の戦争、義兵戦争の経験から、軍事的に対応しないと統治出来ないという認識に到達していたからです。それが憲兵政治です。それは軍隊が何万人にもなる義兵を「討伐」して、ようやく「差別と暴力」が支配する植民地政権を作った。別の見方をすれば、総督府は活火山の上に立っている権力だからです。

二千万の朝鮮人の怨嗟の目に囲まれていたから針鼠のように武装しなくてはならない、という権力。だから総督が現役の陸海軍大将であり、憲兵の支配する統治しか出来ないのです。憲兵の権限は三ヶ月以下の懲役、罰金100円以下の犯罪、これに対しては片手で検事、片手で判事の憲兵が犯罪即決令でその場で処刑できる。こういう江戸時代以前の権限を持つ政権が出てきたと言うことです。これはまさに軍政ということです。軍政下に朝鮮の支配、1911年に始まった土地調査事業から鉄道、道路など植民地のインフラ整備が強行され、一応の成果を上げたのが1918年、3.1の直前なのです。

そのやり方はどうだったのか。ひとつだけ例をあげます。憲兵統治下の道路工事を俗称「鉛筆道路」といいますが、あの町からこの村までと決めると地域の農民の田地を没収し、労力を徴発、一日一食すら難しとする人たちが弁当を携帯して終日無償にて駆使される。「素より極貧の民なれば労役に出たりとて宿屋に泊るの資力なく終日瓜をかじりて労役したる後、夜ははかなき露宿の夢を結ぶ、嗚呼この如き細民の苦痛、何の機関によりて仁者に訴えんや彼らの怨恨の焦点たる憲兵」(中野正剛「我が観たる満鮮」)が実態なのです。

権力がのさばればのさばるほど、二千万民衆の怨嗟の的になっていくこと、逆に言えばその反動がもたらす敵意の増幅と言うことです。

自分たちの支配が深まれば深まるほど朝鮮人は怖いと思う、そういう支配者の後ろめたさを持った政権だと思います。

それは朝鮮民族は敵だ、民族主義を除かない限り日本人は安住できないという考えになる。即ち朝鮮人のもつ固有の民族性が敵視の対象となるのです。

1913年にできた朝鮮人識別法は、怖い不逞な植民地朝鮮人が日本に来る、だから特徴をみて識別しなくてはならない、識別して監視しなくてはならないということになるのです。ちなみにこの頃の日本のマスコミの朝鮮報道は不逞、不逞、不満の形容詞で溢れています。作家中西伊之助は「私は寡聞にして未だ朝鮮国土の秀丽、芸術の善美、民情の優雅を紹介報道した記事を見たことは殆どない。……そして爆弾、短銃、襲撃、殺傷—とあらゆる戦慄すべき文字を羅列して、いわゆる不逞朝鮮人—の不法行動を報道しています。それも新聞記者の事あれかしの誇張的な筆法をもって」(『婦人公論』1923年)とのべています。そういうことを前提に3.1運動を考えてみたいと思います。

3.1運動弾圧は徹底した武力行使でした。『現代史資料』(25, 26)という本は3.1運動弾圧資料集です。これは全部日本側軍部の資料です。日本の現地の陸軍が、討伐した3.1運動で朝鮮人と対決をしたその毎日毎日の戦果を陸軍省に報告した資料です。これを「日次報告」と言います。「日次報告」に出て来る数字を積算するだけでも千人を超える死者が数えられています。そのひとつを見ますと「3月10日平南孟山二再び天道教徒100憲兵分遣所二突入シ、歩兵ト協力発砲撃退

ス、憲兵1即死、補助員1重傷、暴民約50死傷ス。『現代史資料』25、105頁にこういう報告があります。もう少し詳報によると「暴徒ノ死傷ハ事務室ノ内及ビソノ前ニオイテ銃弾命中シタ者51名ニシテ負傷者13名ニシテ負傷者ハ受傷後逃走セリ」とある。総計で67名死んでいます。76発の弾丸が使われています。100名のデモで67名死んだというのは、兵士に百発百中、皆殺しという敵意がないとできないということです。日本の「つくる会」の人たちは3.1運動の「裁判の結果死刑判決は一人もいなかった……世界一寛容な判決」といつているが、裁判以前の無数の即決の死刑があったのです。日本軍自身忠清南道での日報に「暴民死刑十四、傷不明」と報告しています。

水原堤巖里で教会への放火殺害された30余人はデモもしていません。指揮官有田中尉は朝鮮人は即ち独立を考える不逞の徒という認識です。『朝鮮独立運動の血史』を書いた朴殷植によると兵力を使用して鎮圧した。死者は7,504名、負傷者15,961名、被囚者46,948名にもなった。要するに平和的民衆のデモを鎮圧する権力のあり方としては異常なのです。日本で米騒動がありました。私は朝鮮の3.1運動より米騒動の方が過激なデモだったと思います。米蔵に行つてぶち壊して米担いでくる訳ですから。この時日本政府は寺内内閣、内務大臣が水野錬太郎です。両者とも朝鮮支配に関係がある、これ覚えといて下さい。水野錬太郎は、この時戒厳令は布かなかった。騎馬隊は出ました。デモが騎馬隊に蹴散られるということはあったと思いますが、死者は無いです。3.1運動後に中国で五四運動が起きます。これも軍閥政府、そして軍閥政府の後ろには外国の日・米・英・仏がいますが、反権力闘争に間違いありません。中国全土で多くの学生、労働者が蜂起しましたが死者はすくないです。半植民地権力でも人は殺さなかった。しかし植民地朝鮮の3.1運動は五四運動とも米騒動とも違うもの凄い死者がでているという特徴があります。

これは敵視した戦争状態が伏流化しているということが日本の朝鮮支配ということです。つまり朝鮮人が日本の統治に黙って従っていれば仮の平和があります。しかし一旦自分の声をあげたら皆殺しの対応が待っているという構造です。1923年に起つた震災の4年前です。また3.1運動の結果、上海に臨時政府が成立し活発な独立運動を展開していました。3.1の翌年中国の間島（延辺）、今の朝鮮族自治州の所、ここに日本軍が乱入しました。何故乱入したかという義兵戦争で朝鮮領内を追われた義兵たちが間島にいる朝鮮人大衆を拠り所にしてそこで義兵戦争を継続していたからです。本国内で3.1運動が起これば臨時政府ができると俄然、彼らは勇気づけられ武装闘争を再開した。国境襲撃事件が頻発します。いわゆる果てなきゲリラ戦争です。またロシア革命がウラジオストックまで波及してきて、シベリアに出兵していた日本軍が敗退に敗退を重ね海へと追い詰められてくるという状態でした。中国では五四運動が起これば日本が21箇条の要求を取り下げざるをえない、日英同盟も破棄（1922年）されるという時でした。つまり単なる民族独立運動ではなく国際的な反日気運と社会主義という思想を持った解放運動という局面がこの頃から見え始めるのです。そういうものと日本軍は植民地防衛のため、「満州」シベリアの最前線で戦っていたのです。この最前線にロシア、中国だけでなく朝鮮がいるということです。『シベリア出兵憲兵史』という本があります。その中で日本軍に対して最も勇敢に戦ったのは朝鮮人ゲリラだったと書いています。尼港事件で日本人が皆殺しになる事件がありました。その時に中心的だったのも朝鮮人ゲリラだった。そういう意味での現場の日本軍部、官憲は今まで連続的に見てきたように、朝鮮独立

運動への警戒、敵視がより強くなる、信念としての社会主義思想が加わっているという恐怖感をもってくる、日本が朝鮮支配で一番警戒したのは、朝鮮問題が国際化するという事でした。だからあらゆる手をつくして防衛しようとする、しかし実際には逆に展開している。1920年代、日本軍の戦略には3.1運動、間島事件、シベリア出兵、この3つの経験が新たな朝鮮人への敵対関係即ち民族問題だけではなくて総合されて思想、主義者まで含めた、要するに思想狩りを伴う、関東大震災朝鮮人虐殺になっていったのではないかと思います。日本の朝鮮憲兵隊司令部は「大正3年～9年戦役」という言葉を使っています。間島での朝鮮人への日本軍の軍事行動、日本では知られていませんが一つ例をあげます。

1920年10月中国で発行された『震檀』という新聞があります。中国にある臨時政府系のグループが出していた新聞です。「十月二十九日日本軍数百名ハ突如トシテ延吉県細鱗河方面ニ至リ、韓人家屋数百戸ヲ焼キ韓人ニテ銃殺セラレタル者夥シ、又翌三十日午前八時三十分延吉県街ヲ距ル約二里帽山東南青溝村附近韓人部落七十余戸ハ日軍ノ為ニ一炬ニ付セラレ併セテ五百余発ノ銃弾ヲ発射シ、同村ヲ包圍攻撃セリ、同村居住韓人三百余名ノ中、辛シテ遁レタルモノ僅ニ四、五名ノミ、其ノ他老若男女ハ火ニ死セスハ銃ニ傷ツキ、鶏犬タリトモ遺ル所ナク、屍体累々トシテ横リ、地ニ満チ、血ハ流レテ川ト成シ、見ル者涙下ラザルハナシ。」カナダの宣教師も同じような実見談を宣教本部に報告書を出しています。このとき間島で受けた朝鮮民衆の被害は中国政府が日本政府に対して損害賠償要求を出していますが、数字にすると次のようです。中国でおきた事件ですから当然中国政府が国際問題として要求したのです。それによると殺された者3,103名、捕らわれた者238名、強姦76名、家を焼かれた数2,507戸、焼かれた学校31校、焼かれた教会7棟となっています。作戦の特徴は、日本軍は独立軍と一般市民の区別がつかなかった、即ち朝鮮そのものが不逞な敵、日本の秩序に従わない異端は即処刑されたことであります。

これをやったのが朝鮮にいた駐屯日本軍です。越境して攻撃しようと言いだしたのは誰かという
と日本の右翼です。建言をしたのが右翼です。黒竜会頭山満、内田良平の連中です。以下内田の文章です。

「朝鮮独立騒擾再ビ黙視シガタク明石大将（明石元二郎憲兵司令官）ニ面会シ其由テ来ル所以ヲ述べ、改革意見ヲ陳述シ、翌大正九年ハ更ニ朝鮮ニ遊ヒテ海外ニ於ケル不逞輩ノ陰謀ヲ察知シ内閣諸公及総督府当局者ト連絡シテ主謀者タル李喜侃ヲ誘出シテ悦服セシメ其陰謀ヲ中止セシムルト共ニ田中（義一）大将ニ意ヲ具シ朝鮮出兵ヲ請ヘリ。其結果第二ノ騒擾事件トシテ重大ナル風雲ヲ捲キ起コサントシタルヲ、僅カ其ノ分派タル一部ノ暴風所謂珲春事件ヲ勃発シタルノミニシテ事無キヲ得タリ……」。

以上は朝鮮軍の「間島出兵」は自分の功であるとの自慢話であるが、彼の関心は間島だけではない、もっと広い「満州」朝鮮の国境地帯にいる朝鮮人なのです。文書を引用してみます。「此際西比利亜の撤兵は西比利亜過激派中に在る鮮人と満州に在る独立団を通して自由に軍事的連絡を通するを得せしむるものなるが故に通化、海竜城、金城、興京、懷仁、寛甸地方に集合しつつある処の在満韓人独立団員三十余万人にして悉く武装して一斉に江を渡り鮮地に殺到し来らば我守備軍如何にして之を防圧すへきか、況んや彼等の背後には米露支三国の援助あり、加ふるに土着鮮人全部之に響應するの形勢歴然たるものあるに於てをや、之の時に当り我当局は尚ほ平然として漸進的施政

方針を取り以て大乱を未発に防止するを得へしとするが、篤と賢慮廻らされ度次第に御座候」というにあった。謀略の將軍明石元二郎や陸軍大臣田中義一、首相原敬が内田の陰謀に加担してどんな意見を述べたかは不明であるが、賛成または黙認したとみられ、その上で内田は朝鮮総督府、朝鮮軍の要路と協議、諒解事項と思われるのが九月一日付の「在外不逞鮮人撲滅策」である。撲滅策の要領は親日派養成と中国人馬賊を利用することで手足になったのは、部下1,500名を有する長江好とその参謀日本人中野清助（元朝鮮軍憲兵）であった。

以下中野の「不逞鮮人討伐二関スル覚書（天楽覚書、1921年7月）」の要点を摘記すると長江好、中野清助と朝鮮総督府は丸山鶴吉参事官、山口高等課長、千葉了京畿道警察部長、三浦衛生課長らと朝鮮ホテルで会見したのは7月初旬、討伐の経験、意見交換がありその後「弾丸購入金及諸費用の受領」別に中野に謝礼金の意味で「金一千五百円」の交付があった。重要なのは次の文言である。

中野が「言ヲ改メ余等帰隊後不逞鮮人ヲ捕縛シタル時ノ処置ニ付キ質問シタルニ対シ、山口高等課長曰ク、不逞鮮人ヲ捕縛シタル際ハ日本官憲ニ引渡サザランコトヲ望ム、此等ヲ日本官憲ニ引取ルモ実ニ後ノ始末ニ困難ナリ、現ニ間島方面ヨリモ多数不逞鮮人トシテ押送シ来ルト雖モ断罪ノ結果証拠不十分トカ或又弁護士等ガ細工スルトカ至極面倒ナルノミナラズ、タトヘ処刑スルモ出獄ノ後彼等ハ更ニ猛烈ナル悪漢ト化シ如何トモ手ノ下シ方ナク頗ル困却スルガ故ニ卿等ガ既ニ不逞漢ト認定シタル者ハ即時適宜ニ殺戮シテ呉ヨ……尚ホ捕縛シタルトキ押収ノ証拠品及姓名ヲ最近ニ在ル日本憲兵ニ通告ハ引渡サレタシ、且出来得ルタケ日本憲兵ト連絡ヲ保ツ様ニ行ハレ度シ」

馬賊に朝鮮人の無差別即決処刑を命ずる驚くべきものであった。中野清助と長江好が会ったという丸山鶴吉は結局参謀中野の献策で「本当に長江好が覚悟してやって呉れるならば支那馬賊の手で不逞鮮人を一掃することができるのだから最も有効な方法である、殊に日本人の中野が参謀であるから……」と回想している（丸山鶴吉「五十年とところどころ」）。

馬賊がどんな「討伐」をしたのか一例をあげる。

「大正九年十月下旬部下ノ総召集ヲ行ヒ……安図縣ニ向ヘリ、蓋シ不逞鮮人ノ光復団ト称スルハ奉天省安図縣乳頭山ニ在リ四十余戸ノ鮮人ト三戸ノ支那人ヨリ成ル部落ニシテ我日本人ナドハ一步モ足ヲ踏ミ入レ能ハザル、日本排斥ノ部落ナリ、此全部落挙テ光復団員ニシテ種々ナル計画ハ此処ニ於テ謀議セラルナリ、依テ先ヅ我部隊ハ該部落ヲ襲撃シ家屋四十余戸ヲ焼キ払ヒ光復団員、練兵教官及第二隊長、外交部長及同部員三名並區長、副區長、光復団兵卒等十余名ヲ毒瓦斯ヲ使用シ殺戮セリ」その他「十七才以上ノ男子ハ全部殺害」「男子ヲ銃殺シタルハ恵山警察署及憲兵分遣隊ニテ協議ノ結果」などなど。

焼殺、銃殺、時に絞殺、斬首、毒ガスなどの残忍極まりない処刑をした。

こうしたことをした内田は、その時の首相の原に会って意見を交換しているのです。日本が間島に出兵するために中国領ですから口実がなくてははいけない、その面倒を避けるために金で馬賊を使います。馬賊に金をやって朝鮮人の村民を全部殺せという指令を出します。その馬賊が毒ガスとかいろんな武器をもらって朝鮮人殺しをする、朝鮮総督府の山口高等課長が馬賊の参謀と会って人殺しを指示、中野清助という人はその功で勲章をもらっています。

1960年頃、私は中野に会っています。中野は戦災で焼けた青山の頭山満の屋敷跡に、渋谷礼治

氏と共に住んでいました。背の小さい70歳くらいのおじいちゃんでした。

会って話を聞いたらいろんな話をしていました。朝鮮総督府が介在したとか、丸山鶴吉が介在したとか。それを教えてくれたのが同居人の渋谷礼治という人、その頃友邦協会で理事をしていた人。当時私たちは友邦協会で勉強していたので、このことに関心を持っていたら今のうち聞いとけよということで梶村秀樹と二人で話を聞きました。

関東大震災につながる話としてはこのとき馬賊と別に、日本軍討伐隊の坂本俊馬という人がいます。階級は大尉です。この人が討伐記録を残しています。自分が西間島一帯をぐるぐる回って何百の「不逞鮮人」をやっつけたという報告です。この男は震災時の小山東京憲兵司令官の副官です。つまり人間というのは自分の経験、人間的なつながり、先ほど述べたように植民地の反乱と革命情勢という帝国主義の危機の前線にいた重要な連中の多くは震災時に日本に帰ってきて当局の要職についています。これこそまさに震災の虐殺の大きな背景だと私は思います。

1921年にはソビエトモスクワで極東民族大会が開かれ朝鮮、中国、日本、ベトナム、インド、モンゴルなどの代表が集まりました。太平洋会議反対、民族的革命の統一的実行、各民族の平和を論議した大会に朝鮮代表は56名、参加団の中で最大の人員を派遣していました。こうしたことに対する日本官憲の危機意識は深まるばかりでした。

また上海臨時政府の活動も活発でした。とりわけ義烈団の活動は激しいものでした。1921年9月には朝鮮総督府に爆弾を投げ建物を破壊脱出した。東拓への攻撃も続発していました。1922年3月28日上海黄浦で田中義一陸相の中国視察を金元鳳、呉成崙、金益相らが射撃したが帽子に当たり失敗しました。

1921年6月には差別に耐えかねて10名余の日本人を殺害し、「大正の金嬉老」事件といわれる李判能事件がおきました。同年11月4日原敬首相が東京駅で暗殺されますが、犯人の中岡良一を捕まえた警官の発した言葉は「きさま、朝鮮人だな」でした。1922年7月には「信濃川に頻々流れ下る鮮人の虐殺死体」（読売新聞1922年7月29日）と信越電力の工事でタコ部屋労働を強いられる朝鮮人労働者の惨状が怪論として報ぜられていました。朝鮮人はこわい存在であり、反面「いわしは魚か鮮人は人間か」「枕木一本鮮人ひとり」の時代でもあった。

虐殺体制の人脈

これが1920年から1922年にかけての日本の風潮でした。震災の1年から2年前の出来事です。こういう植民地支配の臨場での自分の職務の体験が、日本に戻って来たときの職務にどうにかされたか。何故人殺しから思想摘発問題になったかの鍵があるようです。人脈の話をします。戒厳司令部ができて警備部ができます。ここでいろんな政策を出します。対策会議が開かれ参席する人間がありますが、これらの軍人、官僚の経歴、まだ調べたばかりですが、もっと調べれば出てきます。帝国主義の第一線にいて民族運動をつぶす、植民地戦争をやったという第一線にいた人たちだというのがよく分かります。例えば水野錬太郎は震災時の内務大臣です。3.1運動時の朝鮮の政務総監です。最高指揮官です。震災時東京の警視総監、赤池濃と言います。この男は3.1運動時の朝鮮の警務総監です。3.1運動弾圧の警察の最高峰です。朝鮮総督府の内務長官宇佐美勝夫は震災時東京府知事です。朝鮮総督府の要職にいた者が東京の、政府の一番大事な治安の要職にいたという、

偶然ではないということです。高級将校、軍隊、軍人たちを見ると簡単なスケッチですが関東大震災時の軍事参議官、4人いる中で一番偉い大庭二郎は間島作戦の朝鮮駐屯軍の司令官です。3千何百人を射殺した朝鮮駐屯軍の司令官です。

そのためか震災直後、戒厳軍は天皇、外国公館、重要官庁に警備兵を派遣しますが、大庭個人の家にも4人の警備兵を派遣しています。軍人では大庭だけです。「間島出兵」残虐行為のうしろめたさを持っていたのでしょうか。

関東大震災時の第一師団・師団長は石光真臣、東京駐屯の第一師団長です。彼は3.1運動時の憲兵司令官です。関東大震災時の戒厳司令部の参謀長、阿部信行、彼は後に朝鮮総督になる者ですがシベリア出兵軍の参謀長です。シベリア出兵軍の高級参謀武田額三、イルクーツク特務機関の機関員ですが、関東大震災時の野重砲第7連隊（市川の江東地区の朝鮮人虐殺の連隊）の連隊長です。中岡弥高、彼も同じく特務機関員です。震災時の朝鮮憲兵隊司令官、那須大三郎はシベリア戦争ウラジオ派遣軍憲兵司令官です。まだまだたくさんいると思います。私は全部調べていません。必ずこの人脈はもっとあると思います。

実務級で言うと麹町憲兵隊長特高課長兼任甘粕正彦、例の大杉栄、伊藤野枝、甥の橘少年を殺した狂信者ですが、彼は3.1運動時の朝鮮憲兵隊京畿道楊坪憲兵派出所隊長、朝鮮で活躍した功によって褒賞下賜金400円、関東大震災時の東京憲兵司令官、小山介蔵の副官・坂本俊馬は西間島一帯の不逞鮮人討伐隊長で、すでに紹介しました。馬賊の長江好と密接な関係をもった思想憲兵として辣腕をふるった服部もりき、彼は赤坂憲兵隊長です。全部ではないですがここまで来ると偶然では無いです。さらには関東戒厳司令官に参加した宇都宮14師団参謀長井染禄郎大佐、彼はウラジオで特務機関長でしたがこう言っています。

震災で朝鮮人殺しだけではなくて、日本人、中国人含めて社会主義者の思想狩りをする訳ですがその背景になる事がここにでています。無論彼らの経歴から見てよくわかる事です。彼らがどういう考えをもって「人殺し」をしたかということを証明する意味でこれから述べます。

「今回の不逞鮮人の不逞行為の裏には社会主義者やロシアの過激派が大なる関係を有するようである。社会主義者の計画は支那人並びに鮮人を煽動して不逞の挙動並びに不徳なる行為をなさしめ治安を乱し官憲が大災最悪に遭遇して奔命しておるのを幸いとして官憲の無力を宣伝し盛んに不穏当なる流言蜚語を放ち各種の奇怪きわまる浮説を宣伝せしめ官憲の不信を流説し官憲と人民の間に対抗勢を作らんとすることを策する一方、鮮人を煽動して不逞行為をなさしめ内乱暴動を全国に波及せしめ以て一挙に彼らの希望する極端なる民主政治を実現せんと企んだ（中略）彼らの財源は言うまでもなく上海にその源を有するロシアの過激派と不逞鮮人との間には余程密接なる連絡があるようだ。ヨッヘ氏滞在中においてもロシアの過激派と不逞鮮人と社会主義者との間にある連絡があったように思う。要するに今回の不逞行為はかの三者の三角関係を根拠として行われたものであることは疑いないことである」と戒厳司令部の井染大佐の発言です。

「焦髮日記」の作者橘清は「朝鮮に長く居って、彼の間島事件の時などにも一方ならぬ苦心をなめたと云う戒厳司令部の一将校」から次のようなことを聞いている。「私等の方には職業柄、種々の証拠を握っておる。第一、僕の家へ放火したのなどは明らかに鮮人の所為だ。然し独立なんて、そんな男らしい考のある奴は一人も居ない。皆、私欲の為に悪い事を働くのだ」と。

また、尼港事件（パルチザンによってニコライエフスク港にあった日本守備隊および居留民約700名が殺された事件、1920年5月）にあって、「パルチザンの暴虐の跡を親しく視察したと云う習志野の一将校は「尼港の惨禍なんて人は騒いだが、此の度の東京の災厄に比べては、全く話しにも比較にもならぬ」とのべた。」（『十一時五十八分』）が、いったいなにを比較したのか、報復合戦でもしている認識である。1920年、中国武昌督軍王占元の部下によって行われた武昌市街の惨掠に言及した人もいる。

要するに植民地の反乱と社会主義的な抗日勢力の出現とシベリア出兵或いは青山里戦闘の敗戦または失敗、シベリア出兵というのは敗戦ですから、そういうものに対する危機感というのが震災時の戒厳行動となったと思います。

だから15円50銭が敵になり朝鮮人の主義者狩りが隠密に行われ余波として中国人社会主義者が殺され、日本人の社会主義者は朝鮮人を煽動したという罪名をきせられてやられるという問題がここに出てくるという訳です。だからといって日本の社会主義者と植民地解放をめざす朝鮮人との連帯への警戒があったことを軽視するものではありません。

私は先に述べた甲号乙号指定者の大正9年版名簿を入手しました。関東一円で150人ぐらいですが、この人たちがどれだけ生き残ったか今調べていますが、どのような結果がでるか。地震という偶然、偏見と差別が流言を生んだ、そして興奮した人たちが殺人者になったという、偶然に生じた朝鮮民族の悲劇ではないだろうと思います。そうした一国史というか、国内史観を脱して朝鮮の民族解放闘争の国際化を背景とする侵略と抵抗が生み出した民族対決です。これが違法戒厳令発布の真相です。戒厳令は朝鮮人に対する皆殺し宣言と同じだということです。まだまだいろんな証明はありますが、大筋私の考えはこういう事です。

もっと歴史的にみていく、1923年をみるのではなくその前年、さらにその前の年、朝鮮支配に至る韓日の宣戦布告なき韓日戦争、甲午農民戦争、義兵戦争、こういったものの連続の中、震災下の虐殺になったと考えるべきです。

韓国では甲午農民戦争はジェノサイド戦争と定説です。義兵戦争も虐殺戦争です。何万人という人々が殺されています。

昨年のある日、北大の井上勝生さんが山口県から電話で、東学を討伐して錦絵の題材になった竹内大尉という人の生家の資料を集めたが、そのひとつに村の谷が白衣の死体で埋まるという記録があった、戦意を失って投降した者や東学教徒の多い部落をみな殺しにしたという考古学的な発掘がなされているという事でした。

今日本では、伊藤博文がよりましな帝国主義者として再評価があれこれ出てきています。植民地がなくなって70年近く経っているのに「帝国意識」だけは依然残っているばかりか復活しているのが現状です。日韓の歴史確執は、伊藤博文と安重根の評価のちがいのものなのです。

先日、露日戦争後、韓国統監に伊藤博文がなって「併合」を進めているのに反対する義兵戦争を文化センターアリランで話しましたが、小倉第12師団第14連隊の「陣中日誌」にある討伐記録によると1907年から1908年にかけての11ヶ月で1万3,300人ものが殺されている、投降したのちに撲殺されている人も多い、これはもう宣戦布告なき戦争といってよい、そしてそれが司馬遼太郎の「明治の栄光史観」なのです。いいすぎでしょうか。

自警団が見境なく朝鮮人は敵だと襲いかかりますが、あれは日本の侵略戦争時の兵隊。彼らは朝鮮を経験している、「満州」、シベリアの戦争を経験している、除隊をして帰ってくる、兵隊に行く時には役に立つ兵士として敵視教育をされている、そういう属性を持たない限り町のおっちゃんが入殺しを簡単にできるものではないというのが私の考え、そういう意味では国家犯罪です。国家が侵略という事をするにふさわしい、国民を染め上げていく、軍隊は当然そういう機能をもっている訳で、それと中々不屈な朝鮮人、容易になびかない不逞な朝鮮人という対抗関係。そしてもう一つは急速に変わっていく国際関係という問題があると思います。

このように見ないとどうも私は納得いかない。流言が誰からでたという問題だけではないということです。

在日朝鮮人にとっての問題意識

さて私に与えられたもう一つの課題「在日100年の歴史についてこの事件はどういう意味を持つのか」について述べます。

日本政府に1923年末の国会で永井、田淵という二人の代議士が朝鮮人に謝罪しないのかと質問をしました。首相の山本権兵衛は「目下調査中」と答えたのみでその後調査も謝罪もありません。その結果の一つを竹久夢二は「東京災難画信」で次のように伝えています。即ち子供の間の「自警団遊び」の流行であります。

「萬ちゃん、君の顔はどうも日本人ぢゃあないよ」豆腐屋の萬ちゃんを掴まへて、一人の子供がさう言ふ。郊外の子供達は自警団遊びをはじめた。「萬ちゃんを敵にしやうよ」「いやだあ僕、だって竹槍で突くんだらう」萬ちゃんは尻込みをする。「そんな事しやしないよ。僕達のはただの真似なんだよ」さう言っても萬ちゃんは承知しないので餓鬼大將が出てきて、「萬公！敵にならないと打殺すぞ」と嚇かしてむりやり敵にして追っかけ廻しているうち本当に萬ちゃんを泣くまで殴りつけてしまった。子供は戦争が好きなものだが、当節は大人までが巡査の真似や軍人の真似をして好い気になって棒切れを振りまわして通行人の萬ちゃんを困らしているのを見る。

ちょっとここで、極めて月並みの宣伝標語を試みる。

「子供達よ。棒切を持って自警団ごっこをするのは、もう止めませう」（都新聞、1923年9月19日）

朝鮮人は差別されて当然、怖いから避ける存在、暴力を行使しても良い対象となった。それがどんな差別現象となったのか韓日の二人の文学者の記録を紹介しましょう。一人は永井荷風、一人は金達寿です。

先に永井荷風の1930年と1936年の日記。

「昏黒三番町に徒かむとて谷町通にて電車の来るのを待つ、悪戯盛の子供二三十人ばかり群れ集り、鬼婆ゝと叫ぶ中には棒ちぎれを持ちたる悪太郎もあり、何事にやと様子を見るに頭髮雪の如く腰曲りたる朝鮮人の老婆、人家の戸口に立ち飴を売って錢を乞ふを、悪童等押取巻き棒にて地を叩きて叫び合へるなり、余は日頃日本の小童の暴戾なるを憎むこと甚し、この寒き夜に、遠国よりさまよひ来れる老婆のさま余りに哀れに見えれば半圓の銀貨一片を与へて立ち去りぬ。」『断腸亭日乗』（1930年正月8日）

「此日の東京日ゝの夕刊を見るに、大阪の或波止場にて、児童預所に集りゐたる日本人の小児、朝鮮人の小児が物を盗みたりとてこれを縛り、さかさに吊して打ちたゝきし後、布団に包み其上より大勢にて踏み殺したる記事あり。小児はいづれも十歳に至らざるものなり。然るに彼等は警察署にて刑事が為す如き拷問の方法を知りて、之を実行するは如何なる故にや。又布団に包みて踏殺す事は江戸時代伝馬町の牢屋にて囚徒の間に行はれたる事なり。之を今、昭和の小児の知り居るは如何なる故なるや。人間自然の残忍なる性情は古今ともにおのづから符合するものにや。怖るべし。怖るべし。嗚呼怖るべきなり。」『断腸亭日乗』（1936年4月13日）

金達寿の回想。

「白衣の朝鮮服を身につけた母と私が…人通りの多い街中を歩いている」時「2、3人づれの私と同じ年くらいの子供が私たちに向かって」「チョーセンジンだ。やーいチョーセンジン。」といった。私はその「チョーセンジン」という日本語がまだ分からなかったからぼんやりとした眼差しを彼等に向けただけで側を通りすぎたが…そのうちの一人が「いいー」と私に向かって目をむき赤い舌を出して見せた。それで私は初めて彼等は私たちに向かって何か悪意がある言葉を投げたものなのということがわかった…いわば私は「朝鮮人」に向かって「チョーセンジン」ということが侮蔑語であり悪口であることを日本へ渡って初めて外に出た第一日のうちに早くもわかった訳だった…その後も同じことはずっと続いた。というよりそれは今日なお、生涯続いているといってよいかと思う。」『わがアリランの歌』。

「なかには石をなげつけてくるものもある…母は「イノムチャシクドル！」と言いながら…足下の石ころを拾って投げ返すこともあった…母は私に向かって言うのだった。「お前だけは私を避けないで、こうして一緒に歩いておくれよ、お前の兄ときたら道ばたで出会ってもあれはどこの誰だという顔をして、私を避けて行ってしまうんだよ。お前からそうされたら私はもう生きて行けないよ」『わがアリランの歌』

金達寿先生の渡日は1930年で荷風日記と同じ頃であるが、先生の回想より少し遅れて1934年に渡日し1938年に小学校1年になった私の体験と共通する。丁度中日戦争が勃発した直後で子供の世界にも「戦争ごっこ」が流行していたが私は常に「支那軍、蒋介石軍にされて追いかけ廻された。日本軍の大將は中島敦と言った。私はそのとき受けた心的外傷は忘れられないし、蒋介石に対する妙な親近感は今でもある。「とりまきとりまきエッサッサ」という遊びもあって、朝鮮の子を5、6人餓鬼どもが包囲して「チョーセンジン、チョーセンジンとパカにするな、同じ飯食ってとこちがう」と朝鮮訛りの日本語で囃したてた。女の子などはその渦中に入ると座り込んでただ泣くだけであった。私も道で母に会っても気づかない振りをした。1944年祖母が来日し駅頭で私を見つけて懐かしがって「ドクサーン」と声をかけられたとき逃げ出した事もある。痛恨の思い出である。

これは小学生時代（1938年から1944年）の恥ずべき記憶のひとつである。ケンカをしても「朝鮮ヤロー」と言われると勝負はついた。私の母は妹が泣くと「巡査が来るから泣き止め」と言っただけで、日本の母親達は「鮮人が来るから泣き止め」と言っただけで。嘘のような本当の話である。

虐殺の記憶がどのように残って在日を包囲していたのか、「皇民化」「一億一心」「一視同仁」の時代の二つの官憲資料を引用しておく。

●「疑心暗鬼」を生み出す治安当局

「第一に民族独立運動の状況であります、朝鮮人の思想分子の中には、数としては多くはありませんが、（昨年中の検挙者数一六八名）未だに朝鮮独立の悪夢より醒めず、殊に最近に於てはその行動が漸次謀略的になって行く傾向があるのであります。即ち此の例としましては、昨年警察庁に於て検挙しました学生を中心とするグループは、空襲の際には、

（イ）防空防火を妨害する為、用水其他の設備を破壊すること。

（ロ）物資輸送を迫害する為輸送機関を破壊すること。

（ハ）混乱に乗り、悪質な流言を流布して、一般朝鮮人の団結を図り、対内地人的に対立せしめ、之を暴力蜂起に誘導すること。

等を計画し夫々分担を決定して居った事実があり、又最近に於ては、之も目下警視庁に於て検挙取調中ではありますが、在京の朝鮮人苦学生が秘密グループを組織して、

（イ）空襲の際市内各地に朝鮮人を集合せしめて、敵機と呼応して不穏行動を敢行すること。

（ロ）敵落下傘部隊の降下ありたる際は之に参加して我軍と抗戦すること。

（ハ）日ソ開戦したる場合はソ連側に投じその援助を受けて朝鮮の独立を図ること。

等の不穏計画を樹て、同志を糾合し、策動して居った事実があります」

「第三には内地人の朝鮮人に対する関係であります。

現在一般朝鮮人の間にも空襲其の他非常事態が発生した場合、善良なる朝鮮人迄内地人の為に危険視せられて迫害を加えられるのではないかと心配して居る向が相当あるのであります」

「要するに非常事態の発生した場合に於ける朝鮮人の指導取締は、

（イ）民族的な不穏分子に対しては、事前より視察内偵を厳にして取締を加へて蠢動の余地なからしむること。

（ロ）一般朝鮮人に対しては如何なる事態が発生するとも必ず、帝国の勝利に帰することを確信せしめ、又当局の指示に依って行動する限り絶対にその身辺を保障することを徹底せしむこと。

（ハ）内地人に対しては徒らに朝鮮人を危険視して輕挙妄動することのないように注意すること。」

（内務省警保局「朝鮮人の指導取締に就て」1943年、『集成』第五卷、13頁）

●空襲下における震災／虐殺の記憶（1944年）

「殊に注意を要する傾向は段々空襲の危険性が増大するに連れまして、内鮮人双方共に関東大震災の際に於けるが如き事態を想起しまして善良なる朝鮮人迄内地人の為に危険視せられて迫害を加えられるのではないかと杞憂を抱き又内地人の方面にありましては空襲等の混乱時にありまして朝鮮人が強窃盗或は婦女子に対し暴行等を加へるのではないかと危惧の念を抱き双方に可成り不安の空気を醸成し果ては流言飛語となり其れは亦疑心暗鬼を生むという傾向のある事実であります。現に内地人の方面にありましては非常事態発生の場合の自衛処置として日本刀を用意し或は朝鮮人に対する警察取締の強化を要請する向があり就中一部事業主等にありましては杞憂の余り之が取締を警察の手より軍隊に移して貰い度いと公然と要望するに至って居る者もある様な状況であります。一方朝鮮人の側にありましては再び斯かる迫害を受けるに非ずやとの危惧の念より警察に保護を陳情する者がある様な状況にありますので一旦非常事態発生の際には細心

の注意と万全の処置を講じて置くことがなければ不祥事件の惹起する危険性が充分にあるのであります」（警察部長会議に於ける保安課長説明要旨〔1944年1月14日〕、内務省警保局保安課〔治安状況に就て〕『集成』第五巻、15-17頁）。

では解放後どうだったでしょうか。

戦争直後の日本人一般の朝鮮人観は、アメリカに負けたのはしょうがないが、朝鮮人に威張られるのは我慢ならないということであった。

目障り、余計者として「オ前タチハ米英カラ独立サセテ貰フノdealカラ我々ノ敵deal。早く朝鮮へ帰レ」「鮮人ノ大部分ハスパイ行為ヲシタ（特高秘鮮号外昭和20年9月4日、新潟県警察部長、内務省警保局保安課長宛報告）にみられる憎悪、白眼視は全国的な風潮であった。千葉県では米占領軍の歓迎にでかけた朝鮮人3人が警官に射殺される事件もおこった。日本民衆の、二級の国民はもう余計者、目障りの存在でしかないとした記録は、解放直後の警察文書にうんざりするほどみることができる。

この風潮に朝鮮人側はどうしたか。「関東大震災ニハ内地人ノ誤解カラ多クノ半島人ガ殺サレタ事ガアルガ、又アノ様ナコトガ起キルト悪イカラ余リ内地人ヲ刺戟シテハナラヌ」、虐殺を「避クルニハ逃走ヨリ他ナシ」（特高秘発第三一四七号、朝鮮問題資料集、日本敗戦直後の在日朝鮮人の状況）であった。

震災、虐殺の記憶は壮絶な帰国ラッシュになってあらわれた。この状況を目撃した宮本百合子は「播州平野」で「朝鮮人、彼らは西へ西へと動いています。港へ、港へ、海峡へ、海峡へと動いています」と。連行されての強制労働が厭で厭でたまらなかったのも事実であるが、いつ殺されるのかわからない風聞がみちみちていたからである。桔尾花にもおびえる形で逃げだした人たちの「聞き書き」もある。解放の日から6ヶ月くらいの間に150万の人が帰国している。詳論すると45年8月15日、在日の総人口は230万～240万とみられているが、46年3月GHQの指示で日本政府が帰国希望者の調査をしたときの総人口が64万7,006人（この内51万4,060人が帰国希望）であった。とすると前年を230万としても165万がこの間に帰国したことになる。この時の帰国条件は、持ち出し現金は一人1,000円、荷物は一人150ポンドの制限があった。それでも帰りたかったのである。こうして230万の在日同胞社会は一挙に崩壊した。

関東大震災の体験は、あらゆる意味で在日生活の原点であった。

しかし、この問題は解放後もなぜかあいまいにされたままだった。知る限り45年12月7日、朴烈出獄の歓迎会で「関東大震災時の真相究明と責任者の処罰」を求めた記録があり、朝鮮人連盟が「関東震災の白色テロルの真相」や「朝鮮人狩り」という作品を刊行。船橋に慰霊碑を建立したが、49年朝連解散後、朝鮮戦争とその後の連続進行形の在日朝鮮人弾圧の日常との戦いにあけくれる日が続いて、震災の真相究明は表層的には低調となっていたのが事実である。

私の記憶では私たちが関東大震災下の朝鮮人虐殺を告発した頃、共産党議員の質問に対し時の池田勇人首相（1960～64年）は「寡聞にして存ぜず」と答弁しました。つまり日本民衆に刷り込まれた流言蜚語の取り消し、謝罪は、政府次元では戦後も無かったのです。

私は「関東大震災60年を思う」で次のようなことを書きました。長い引用になりますが読んで

下さい。

「……このような風潮に戸惑いながら、ある新聞に次のように書いた。『日本の友人達にはこの書物が朝鮮人である私達の手によってなされたことをある意味で悲しいことだと言わざるを得ない。被害者の立場から被害者を調査することの正当性と同時に、反面そのいやらしさを感じなかったとすれば私はうそをついていることになるからである。』

何が悲しく、何がいやらしいのか。日本人はなぜ自分の問題として考えてくれなかったのか、朝鮮人としていつまでも告発者でいたくない、もっとカラリとした相互信頼関係でありたい、という願いからであった。

そうした願いは期待通りにならなかった。まだ壁は厚く、内省の目も簡単には広がらなかったのである。当時のジャーナリズムにおこった一つの現象を紹介したい。『週刊朝日』が「関東大震災四〇年に寄せて」の特集をくみ、「ある残虐物語への証言—朝鮮人虐殺のバールをはぐ」の記事を載せたのは、1963年8月31日発刊の9月6日号でした。大マスコミとしては初めての試みで、読者の反応は大きかった。初めて知ったという人、昔の記憶をよびさまされた人、様々な投書が殺到した。同誌9月13日号は「読者のイス」欄を2ページに拡大してその投書で埋めたほどであった。なかには真実を明らかにする貴重な証言もあった。活字にはならなかった投書の一つには、荒川の堤防を三角形に掘った断面図を添え、ここに埋めたというものもあった。マスコミがその気になればまだ多くの真実を明らかにすることが可能だったはずである。生存する体験者、目撃者も多かったのである。ところが、9月7日の『毎日新聞』は次のような記事を載せている。

「政府は最近、一部マスコミの企画、番組が低俗化しているとして、民間人からなる『マスコミ対策委員会』設置を進めているが、六日開かれた政府・与党連絡会議でもこの問題が取り上げられ、近く政府、自民党でそれぞれ対策に乗りだすことになった。この日の政府・与党連絡会議ではまず橋本自民党広報委員長、園田国対委員長らが「最近一部のマスコミの中に日韓交渉が進行中だというのに関東大震災当時の朝鮮人虐殺の話を特集するなど無神経な編集をする週刊誌や殺人現場を放送するテレビなど、かなりひどいものがある……」と述べた。」（季刊『三千里』36号、1983年）

朝鮮人虐殺の真相究明を低俗番組、無神経な編集と非難したのである。時の池田首相は「テレビなどは特に慎重な配慮を望みたい」と再び言論統制に動いた。真相究明の動きに対する逆流であることは明らかであろう。歴史的事実の発掘を目前の「日韓会談」と連関させて、犠牲者より国家利益を優先させるという、そのためにどれだけ多くの事実が永久に埋没してしまったのか。

首を切り、手足をもぎ、生きたまま火中に投げ、縛って海や川に投げ、縛って通行人にのこぎり引きで一寸きざみのあの世行きなど、残忍な殺害について一言の謝罪なく、放火、投毒、強姦などの汚名の名誉回復もなしの90年間。

そしていま、新宿で、鶴橋で、韓民族憎悪、「よい朝鮮人も韓国人も殺せ」のデモは現在進行形である。

本稿は、2013年9月14日、「朝鮮人虐殺をどうみるか—日本の朝鮮観の形成」と題する講演録を加筆訂正したものである。

（かん・どくさん 在日韓人歴史資料館館長）